

びわこの 考湖学

30

琵琶湖の水運を大きく変えた人、それは豊臣秀吉でした。

信長から秀吉へと天下人が移り変わり、琵琶湖に対するまなざしも移り変わっていきまます。小規模な舟が琵琶湖畔に数多く存在した小規模な港に分散していた状況が、激変したのです。

天正14(1586)年、秀吉は琵琶湖と延暦寺にらみをきかせていた坂本城を廃し、大津に城を築かせました。ついで翌年2月、初代大津城主、浅野長政(長吉)は、軍用や輸送に用いる船があまりにも少なかったことから、大津浦に坂本、堅田、木浜などから100隻の舟を集め、大津浦からの荷物・旅人の積み出しを独占し、他浦での課役負担を回避させるという特権を持つ「大津百艘船」を組織したのです。

秀吉の縁者で家臣の浅野長政が大津城主となり、大津百艘船という船団を組織した理由は何だったのでしょうか。

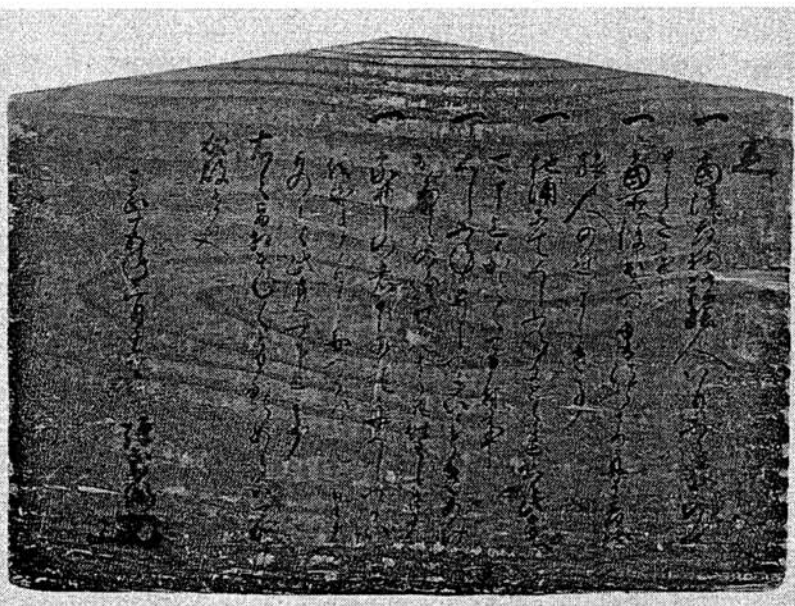
この頃、秀吉が城を築いた大坂や伏見に政治経済の中心が移り変わっていました。そこで、東国や北国に分散して

いた合計80万石にもおよぶ秀吉の蔵入地(所領)の年貢米を渋滞なく運ぶ必要がありました。

そこで、大津は、東国・北国から琵琶湖諸浦を経て京都や大坂を結ぶ交通網の要としての役割を担ったのです。大津百艘船が大津城主によって特権を与えられ手厚い保護を受けた背景には、東国・北国の物資を大坂へと運ぶことが義務付けられていたからなのでした。

秀吉の便宜のために組織された百艘船は、大津にも大きな影響をおよぼしました。日本列島の東半分の物資が大津を経由することにより、未曾

大津百艘船



天正15年、大津百艘船の創設にあたり5力条の特権が掲げられた「浅野長吉高札」(長浜城歴史博物館蔵)

有の繁栄をみせたのです。このことについては、いざれ詳しくお話しすることになります。

ともかく、人が琵琶湖とかかわり始めて以来、小規模で分散化していた湖上交通が、

秀吉の手によってようやくまとめられたのです。

琵琶湖を渡る風を読み湖水の流れを読んで船を操ることに長じた彼らは、時代の流れを読むことにおいても長じていました。慶長5(1600

0)年、天下分け目の関ヶ原の合戦の前哨戦として東軍についた京極高次による大津籠城戦がありました。が、なんと、その際に百艘船の面々は高次に従いともに籠城し、戦後、彼らは褒賞の銀子を与えられたのです。

徳川家康は大津城を廃し、膳所で城を築き始めます。では、大津はどうなったのでしょうか。膳所築城と同時に大津は天領となり、徳川政権の経済を担っていた幕府の代官頭である大久保長安が支配することになりました。長安は、歴代大津城主と同様に、大津百艘船の特権を認めました。

さらに慶長7(1602)年、東海道の宿場のひとつとして大津宿に課せられた人足役が、大津百艘船の船頭が居住していた船頭町(現在の長等2、3丁目)などでは、幕府の御用を勤めているという理由から免除されたのでした。

秀吉と長吉、家康と長安。それぞれの天下人と懐刀が直接支配を試みた大津の港は、東国と西国を結ぶ経済の重要拠点であったのです。

(滋賀県文化財保護協会)

畑中英二

秀吉がまとめた水運